

# 担任とフリーの立場をこえて

杉浦 真紀子

## 担任の立場でかわる

私は、昨年一年間、三歳児クラスの担任をしていました。本園では、一日を通して子どもの遊びを中心とした生活を送っているため、登園後、自分の好きな場や遊び、人を求めてさまざまに出かけていく子どもたちを把握するのに必死な毎日を送っていました。当時のクラスの様子はといえば……。男の子の多くは入園当初から園庭、ホール、他学年の保育

室と、好奇心旺盛に園舎中を駆け回っていました。逆に多くの女の子と数名の男の子が保育室に残り、担任保育者のそばで何かを作ってもらったり、一緒にままごとをしたりすることで安心して過ごしていました。そして降園間近になると、保育室の外で活動的に動き回っていた人たちが、泥まみれになり、まだまだ遊びたいと駄々をこねながら、年長児や他の保育者に手を引かれて保育室に戻ってくる……。というのがいつもの光景でした。

私はいつも、外から戻ってくる人たちに、「今日  
はいつたい何を楽しんできたのだろうか？」と、着替  
えや帰り支度を手伝いながら、思いを馳せていまし  
た。本園の園舎の構造から、最も奥まった位置にあ  
る三歳児の保育室にいと、園庭も他の保育室の様  
子も、殆どといってよいほどわからないのです。三  
歳児の特に一学期、担任保育者は、園生活に不安を  
抱いている人たちへの対応に追われて、どうしても  
保育室に縛られがちです。心では保育室を飛び出し  
ていった人たちの様子が気がかりで、あちこちと動  
き回りたいと思っているのですが……。

しかし、そこをうまくフォローするのが、フリー  
の保育者であったり、他学年の保育者たちであつた  
りするので。本園には、担任以外にもフリーの保  
育者が数名います。保育者全員で子どもたちの成長  
を支えるという意思統一がなされているので、自分  
の目の行き届かないところでも、他の保育者がその

場において保育をし、またその場での情報を提供する  
という現状に、信頼と安心を感じて保育に臨むこと  
ができます。

さて、三歳児も一学期後半から二学期にかけて  
は、心の拠り所がずいぶん増し、生活範囲をぐん  
ぐん広げていきます。担任保育者や保育室を頼りに  
していた人たちも、安心感が増すとともに視野が広  
がり、自分で、あるいは友達と一緒に、いろいろな  
場へと出かけていくようになります。おかげで、私  
自身も保育室以外で遊ぶ人たちのかかわりを求め  
て、いろいろな場を往き来することが可能となりま  
した。そして、気になる人には時間をかけてかかわ  
りながら、一人ひとりがどんな場で、どんな思いで  
遊びに夢中になっているのかを、私なりに見て感じ  
ることができるようになりました。

その一方で、お弁当や降園時間を考えて一日の生  
活の流れをつくっていくことを念頭に置きつつ、ま

だまだ不安になりがちな人への対応も……と、あらゆることにアンテナを張り巡らしながら動いている担任にとつては、「この場（遊び・人）に、もうちょっとかかわっていられたら……」という思いを、抱かずにはいられない毎日でもありました。

それでも三学期には、子どもたちが安定感に支えられながら充実した時を過ごしているという手ごたえを感じられるようになり、私自身、一人ひとりが年中に進級するにあたって抱える課題を見据えながら、ゆとりをもってかかわることができることに喜びさえ感じていました。

### フリーの立場でかかわる

さて、今年になって私は、学年を引き継ぎつつも、立場はフリーとして保育をすることになりました。四月、年中に進級したとはいえ、新しい保育室に新しいクラス（三クラスから二クラス編成へ）、

そして、新しい担任……さらに数名の新入児を加えて、やはりそれぞれが安定感を得るまでには多少の時間を要しました。その間、担任保育者は「先生、あれして、これして！」と頼っていく人たちに囲まれて保育室に釘付け。そんな中、私は早々とホールに出かけていく子どもたちの後を追っていくという、これまでの担任とは相反する動きをすることになるのです。

### A男の姿から見えてきたこと

ホールの中心は、なんとといっても大型積み木です。四歳児のホールでの姿としては、五歳児がいつも簡単につくってしまう二・三階建ての立体的な、背の高い基地に憧れを抱き、今年になって「あんなのつくってみたい！」と挑戦する人が増えてきました。また、初めて大型積み木に触ったという人もいたので、担任が保育室から離れられないでいる時期

に、私は同様に、ホールで積み木を危なっかしく扱う人たちのそばから離れられずにいました。

その中に、昨年私が担任をしていたA男の姿がありました。A男は入園当初から、友達を心の拠り所として活動的に動き回っていた人でした。たいてい、幼なじみ、あるいはクラスで仲の良い友達と行動を共にしていて、ホールでは昨年のうちから二階建ての基地づくりに挑戦するなど、クラスの中でも勢いのある人でした。年中に進級し、仲良しの友達とクラスが別れてしまっただけで、新たな友達関係を築き始めているところでもありました。

そんな彼の遊びに、私はフリーの保育者として、ホールで丸一日、さらに数日とじつくりかわるチャンスが到来したのです。ところが、様子を見れば見るほど彼の言動に??? 一例を挙げてみると……。

「デカレンジャーごっこする人、集まって〜!」

「基地つくるから、みんな手伝って〜!」

と、威勢よく声を張り上げるのは、私の想像通りの姿です。しかしA男はその先、大型積み木一つ触らず、周囲の人たちが積み木を積むのを見ているのです。私は、基地づくりに一番詳しいのはA男だとばかり思っていたので、率直に、

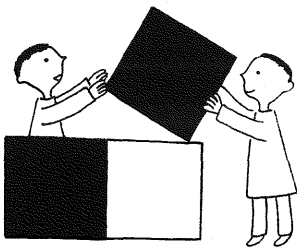
「A君はつくらないの?」

と問いかけてみました。すると、

「あ、そっか!」

とA男は言い、積み木を一つ運んできたのですが、次にそれをどこに置いたらよいかわからない様子でした。

「A男はたしか、昨年から二階建ての基地で仲間と遊んでいたはずなのに……」  
「そんな私の思いと



は裏腹に、保育者の手を借りながら実際に組み立てていくのは周囲の人たちで、結局A男はその後積み木を積むことなく、基地は見事にできあがったのでした。すると、

「よし、ヒーローショーやるぞ！」

と、再び声を張り上げるA男。しかし、遊びのイメージを言葉にして友達の共感を呼び、その場をリードしていったのは、一見おとなしそうに見えるE男でした。私は、A男に対して自分がこれまで思っていた姿と、実際の姿とのズレに少なからず動揺してしまいました。

その翌日、またしてもA男はホールにやってきました。その日は他のメンバーの登園が遅く、A男と私は二人で基地づくりに取り組むことになりました。A男は初め、

「仲間がいないと基地はつくれないんだよね」と、もつともなことを言っていました。やがて、

「B男とC男がいれば、こんなの簡単にできちゃうのにな……」

と、ほつり。B男・C男とは、昨年のクラスでも行動を共にしていた友達のことです。これにD男を含めた四人は、昨年からは自分たちで二階建ての基地を真似ていて、二学期には自分たちで二階建ての基地をつくり始めていました。でも、A男の話では、実際に動いて組み立てていたのはB男とC男のことでした。

当時担任であった私はおそらく、A男が『友達と一緒に活動的に遊ぶ』姿を捉え、そこで満足し安心していたのだと思います。しかし、それではA男の『遊びのイメージを自分なりに言葉や形に表してみる』という点に関しての捉えが不十分であり、A男の抱える課題に迫りきれいでなかったのではないかと反省するに至りました。さらに、その姿をフリーの保育者が捉えていたとしたら、保育者同士の情報

交換のもち方を見直す必要があるのではないかと、とも考えさせられたのでした。

### 子どもとかわる誰もが一保育者

私は、昨年は担任、今年はフリーと、立場を変わって保育実践をすることで、子どものより多様な面や、保育者自身の抱える課題も見えてきたと思っています。この経験を通して、子どもの育ちを保障するために、今の私にできること……。それは、フリーの立場から見える子どもの育ちや直面する課題を、担任保育者に確実に伝えていくことであると考えています。子どもたちは、園生活において様々な場や人・ものを求めて動き、出会った先々で自分を多様に表現しています。ですから、担任の前で表す姿、フリー保育者の前で表す姿が違ってくるのは当然かもしれません。その点も踏まえながら、フリーの立場で感じ考えたことを、担任と共有していくこ

とは欠かせないと思います。

そのためには、これまでも保育者間の情報交換は行ってきましたが、さらに、保育者がお互いにならな立場であろうと、一人ひとりの子どもの育ちに責任をもち、対等に育ちを支えていく存在であるということを明確に意識化した上で、情報交換のあり方を工夫していく必要があるでしょう。どちらかが一方的に尋ねるのでもなく、伝えるのでもない、お互いにその情報の中に一人ひとりの子どもの育ちを確かに見取って共感・共有していく、そういう保育者間の連携が有意義であると、改めて思います。

担任とフリーの立場をこえて目指すもの……。それが、子どもの充実した生活とそこに実現する健やかな育ち……。であるとすれば、子どもにかかわる誰もが、一保育者としての責任をもつのであり、そのことをこれからも常に意識し続けたいと思うのです。

(駒場幼稚園)